

国内スポーツ・ツーリズムに関する研究  
—冬季スポーツイベントを事例として—

野川春夫\*, 山口泰雄\*\*

スポーツ・ツーリズム スポーツイベント スポーツ・ツーリスト イベント・コミューター

A STUDY OF DOMESTIC SPORT TOURISM  
— IN THE CASE OF WINTER SPORT EVENT —

Haruo NOGAWA\* and Yasuo YAMAGUCHI\*\*

**Abstract**

The years 1991 and 1992 saw the number of Japanese traveling abroad exceeding the ten million mark despite the influence of the Gulf War. Domestic travel has also been increasing. Paralleling the phenomenal boom of both overseas and domestic travel has been an increase in the number of Japanese from all social strata participating in a variety of sports related events and activities abroad as well as in Japan since 1988. Sport and tourism tend to be treated by academic and practitioner alike as separate bodies of activity. Although they are inextricably linked, integration of the two has been very rare at the academic level, especially in the field of sport and leisure studies. Thus, the purpose of this study was to explore domestic sport tourism in Japan on the basis of a winter sport event.

The field survey was conducted at Oku-Nikko Cross-country ski event on February 28, 1993. This winter sport event was characterized as an urban type event since people from the Tokyo metropolitan area could commute to the site in a one day trip. A total of 433 subjects voluntarily participated in this empirical study. In order to determine travel expenditures and destinations of tourist attractions, the sample subjects were asked to return an answered questionnaire with a stamped envelope immediately after they got back to their homes. Question items included travel costs, other expenditures, traveling companions, means of transportation, housing accommodation, socio-demographics of sample, and some others. Of the 433, 337 were selected to be "sport tourists" in this study. Data obtained from the questionnaires were analyzed descriptively.

Within the limitations of this study, the findings indicated that the Japanese sport tourists preferred lower expenses, particularly for fares and accommodation. They appeared to employ automobiles as means of transportation with intention of sharing traveling costs with their companions.

**KEY WORDS :** DOMESTIC SPORT TOURISM, SPORT EVENT, SPORT TOURISTS, EVENT COMMUTERS

---

\*鹿屋体育大学 NATIONAL INSTITUTE OF FITNESS AND SPORTS IN KANOYA

\*\*神戸大学発達科学部 SCHOOL OF HUMAN DEVELOPMENT, KOBE UNIVERSITY

## 緒 言

1986年にイスラエルにおいてスポーツ・ツーリズムの国際会議が開催され、スポーツと観光旅行の結びつきが脚光を浴びるようになった。日本交通公社の年次報告書(1992)によると、平成2年には日本人の海外渡航者が史上最高の1,000万人を越え、運輸省の『テンミリオン計画』を予定よ

りも1年以上早く達成し、バブル経済の崩壊後も空前の海外旅行ブームが続いている(図1参照)。海外旅行の主目的も単なる行楽や観光から、スキーやスキューバダイビングなどのレジャースポーツを楽しんだり、マラソン大会やトライアスロン大会への参加などの参加型が増加している傾向がみられる(図2参照)。

また、国内においても小学生から高齢者までの

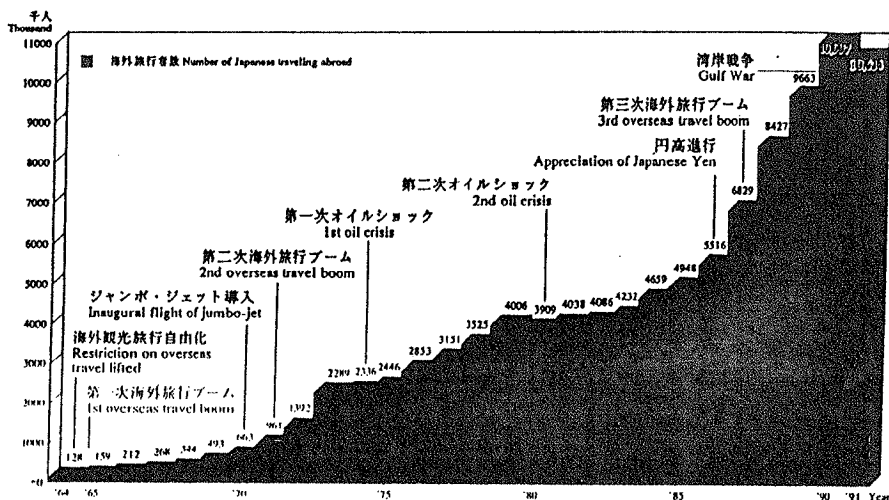


図1. 日本人海外渡航者の推移

資料：法務省「出入国管理統計」  
Source: Ministry of Justice

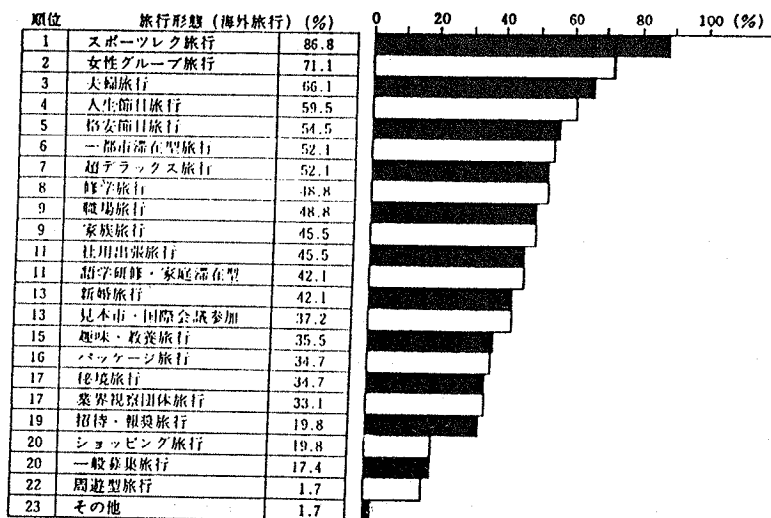


図2. 海外で増える旅行形態

資料：(財)日本交通公社 1991年

いろいろなスポーツの全国大会が盛んになり、鉄道や航空機を利用してのスポーツ・ツアーは日常茶飯事になりつつある。さらに参加者のみならず、応援者（サポーター）や観衆（スペクテーター）といった層もスポーツ・ツアーへの参加が盛んであり、今や社会現象となっているといっても過言ではない。

近年の日本人の旅行の主目的は、年齢・性別や国内外を問わず、単なる行楽や観光からスキーやゴルフ、スキューバダイビングなどのレジャースポーツを楽しんだり、マラソン大会やトライアスロン大会への参加型が増加している傾向が報告されている（JTB, 1992）。このようにスポーツ・ツーリズムは、スポーツの振興に寄与するだけでなく、地域社会にもたらす文化的・経済的な効果も大きいことが注目されており、スポーツ・ツーリズムがもたらす経済的波及効果を推定する基礎資料の集積も重要な課題である。しかしこのように国内・外のスポーツイベントやレジャースポーツへの日本人の参加者が年々増え続けているにもかかわらず、スポーツ・ツーリズムの分野の実証的研究はまだ萌芽期の状態といえる。

さて、スポーツと観光であるツーリズムは、これまで各自の分野で研究が積み重ねられてきているが、この2領域を統合させた研究は洋の東西に関わらず、極めて少ないことが指摘されている（Glyptis, 1989）。「スポーツとツーリズムの2領域を統合する必要が迫っている」という Glyptis（1989：p.166）の意見に呼応するように、日本のスポーツ産業研究会（1990）もスポーツ旅行業をスポーツ産業の一つとして取り扱っていく必要性を強調している。また、21世紀の日本の基幹産業のなかにスポーツと観光が重要な位置を占めるとの見通し（通商産業省）から、この2領域を包括する理論構築と実証研究の確立は急務といえる。特に、従来のスポーツ消費行動の枠組みだけでスポーツ・ツーリストの余暇活動の全容を説明することは難しいことから、新しい理論的枠組みが必要となろう。

そこで本研究では、宿泊を伴うスポーツイベントの参加者を“スポーツ・ツーリスト”と定義し、

日本国内における冬季イベントのスポーツ・ツーリストの実態を明らかにすることが目的であった。

## 概念定義の検討

スポーツ・ツーリズムの定義は、これまでは Leiper（1979）の『スポーツやスポーツイベントへの参加を目的として旅行し、少なくとも24時間以上その目的地に滞在すること』が用いられている。この概念定義に対して、Kenyon（1969）や McPherson ら（1989）のスポーツ参与の理論枠組みを当てはめることを示唆する研究者もいるが、スポーツ・ツーリストを次元や役割及び関与の度合い等によって詳細に類型化することが現時点では必要とは考えられない。また、Kenyon らのスポーツ参与の定義をそのままスポーツ・ツーリストに当てはめるには無理があるといえよう。それは、彼らが用いている Sport Consumers と Sport Producers の概念定義が、日本における生涯スポーツや社会体育の分野には必ずしも適用せず、吟味されるべき時期にきているからである。

Leiper（1979）の定義では、スポーツ・ツーリストはスポーツ参加者及びスポーツイベントへの参加者のみを指し、観衆やサポーターなどの応援者を含んでいないため、いくつかの異論や批判が出されている。『スポーツやスポーツイベントへの参加・観戦・応援を目的として旅行し、少なくとも24時間以上その目的地に滞在すること』と定義すれば参加者のみならず、観戦者や応援者を包括するので適当なのであろう。しかしながら、筆者らは生涯スポーツ振興の立場にあり、スポーツ参加を促進することを研究の大前提としているため、「宿泊を伴うスポーツ参加者」をスポーツ・ツーリストと定義した。

## 先行研究の検討

諸外国におけるスポーツ・ツーリズムの研究（Westland, 1987； Ruskin, 1987； Wang, 1987； DeKnop, 1987）は概念定義と社会・経済的な側面に関する説明に終始しており、実証的な研究はほぼ皆無に近い。これに対して日本では、日本人の

ホノルルマラソン完走者の旅行形態を縦断的に調査した研究(野川, 1992)と, 国内のウォーキングイベント参加者に視点を当てた研究(工藤ら, 1993; 工藤, 1993; Kudoら, 1993)以外はほとんど手つかずの状態である。

海外スポーツイベントへの参加或いは観戦は宿泊を伴うスポーツ・ツーリズムでありながら, ほとんどの研究対象イベントはホノルルマラソンであり, 日本人参加者の満足度(松本ら, 1990)や, 参加意識(塩満, 1990), および日米ランナーの参加意識と属性の比較(山田ら, 1988)などが報告が主となり, スポーツ・ツーリズムの観点からは海外スポーツイベントを捉えてはいない。さらに, 宿泊旅行を伴うスポーツ参加に関する従来の研究視点も, スポーツイベント(山口ら, 1990, 1991; 野川ら, 1990, 1991; 松本ら, 1990)やレジャーライフスタイル, レクリエーション活動などとして捉えており, スポーツ・ツーリズムという切り口の研究はない。

また, スポーツと旅行を結び付けてその経済的効果に焦点を当てた実証研究は, 菊池ら(1991)の海外スポーツイベント(ホノルルマラソン)の日本人参加者の支出傾向と, 野川ら(1993)の国内のクロスカントリースキー大会への参加者の支出傾向を基にした開催地におけるスポーツイベントの経済的波及効果の推定のみと極めて少ない。このような現状を鑑み, 原田(1993)は, ツアー・スペクテーターのもたらす経済効果についての知見をまとめ, 今後の興味深い研究題材であると述べている。

野川(1992)は, 1988年から1990年にかけてホノルルマラソンに参加した日本人ランナー673名を対象として質問紙調査法による縦断的調査を実施した。資料を分析した結果, 海外スポーツイベントにおける日本人のスポーツ・ツーリズムの特徴として, 1) マラソン競技型よりもマラソン体験型が参加者の大半を占め, 参加する楽しみを重視する傾向が強い, 2) 大会開催の時期と種目の特性から6日間コース(4泊6日)が標準的なスポーツ・ツアーとして定着する傾向がある, 3) スポーツ・ツアーの同伴者は, 年齢層と性別で明

確な違いがある, 4) 主力参加者が30歳未満のため, 大会開催地における消費活動は儉約型になっている, 5) 再来志向の強さが行動に反映していないことから, 海外スポーツイベントは繰り返し参加する大会にはなり難い弱点がある, という知見を報告している。

## 奥日光クロスカントリースキー大会の概要

美しい自然と歴史的な史跡が残るアーバンリゾート地日光市には, 年間約800万人もの観光客が訪れる。しかしながら冬季の厳しい自然環境条件に, 冬期間は観光客の減少傾向が続いていた。この観光客の減少に経済的な打撃を受けていた地元日光市, 東武鉄道, 日光市の旅館組合, みやげ物店等が, この減少傾向に歯止めをかける方策としてスポーツイベントに白羽の矢を立てた(個人面接: 1993年2月27日)。

昭和63年から冬期日光地区の活性化とクロスカントリーの普及を目的として「奥日光クロスカントリースキー大会」が開催された。主催は, 日光市, 東武鉄道, 東武興業, 東京新聞, 東京中日スポーツであり, 栃木県スキー連盟が大会の主管となっている。大都市圏内からの日帰りの参加も可能なことから, 本イベントはアーバン型スポーツイベントと位置づけられよう。官民一致協力したイベントとしては, 指宿市の「菜の花マラソン」や埼玉県東松山市の「日本スリーデー・マーチ」があり, いずれも見事な成功を収めている(野川, 1993b)。

参加者は関東一円からだけでなく, 東北からも訪れる本イベントは, 今年で7回目を迎える。平成3年の第4回大会からは, 全日本スキー連盟公認大会となった。大会は滑走タイムを競う競技会の部と, 雪野原を自分のペースで滑るスキーハイキングの部の2種類あり, 参加者は1,500人を越す勢いである。東京新聞スポーツ事業部と東武鉄道, 東武興業が大会運営の中心となり, 受け付けから会場設定, タイムの集計, 表彰式, 後片づけまでを担当する。競技会の役員には, 地元のスキー連盟の役員がボランティアで仕事をするになっている(大会要項, 1993)。

## 研究方法

### 1) 対象サンプル:

栃木県日光市光徳温泉において開催された“第6回奥日光クロスカントリースキー大会”の参加者1,200名を対象とした。

### 2) 調査方法:

申し込み者先着1,200名に対して、調査の趣旨を説明した案内文と質問票と切手を貼付した返信用封筒の一式を、ゼッケン等と一緒に参加者用のポケットに同封して、大会事務局から受付時に各サンプルに手渡す配票郵送法を用いた。

1993年2月28日(大会当日)に質問票を配布し、データ収集期間は3月1日から4月20日とした。この期間に返送された総サンプル数は433(回答率36%)であった。

また、本調査員が大会事務局である「アストリアホテル」、及び光徳クロスカントリーコースの周辺において大会の準備・運営等を観察し、また大会参加者、実行委員、ボランティアらに非公式な面接調査を実施して資料を収集した。

### 3) 調査内容:

サンプルの個人的属性、参加形態滞在日数、同伴者、参加回数、支出総額、イベント運営に対する評価21項目、イベントの情報源、交通手段、観光状況、及び当該イベントへの再参加の希望などを網羅した。

イベント運営に対する評価、及びイベントへの再参加の希望の項目の回答には Likert-scale type の4点評定法を用いた。

### 4) 分析方法:

研究の性格上、記述統計を主とし、必要に応じて参加タイプ別(スポーツ・ツーリストとイベントコミューター)にクロス集計を行った。

## 結果と考察

総サンプル(N=433)のうちスポーツ・ツーリストの条件を満たした宿泊型参加者337名と日帰

り参加者94名をイベントコミューターと定義して分析の対象とした。スポーツ・ツーリストの特性を明確にするため、イベントコミューターを選出して両群を比較した。

イベントコミューターとは、スポーツイベント開催地への往復が旅行目的ではなく、むしろ通勤者が職場に往復するように移動している参加者を指している。この用語は、本研究で初めて用いるものであり、種々異論はあると考えられるが、筆者らのこれまでの調査研究の経験から考え出されたものである。

### 1) サンプルの属性

表1が示すように参加者の男女別の割合は3対2であり、総参加者の男女比率とほぼ同じであった(奥日光クロスカントリースキー大会事務局, 1993)。ジョギングなどの他の生涯スポーツイベントに比べ、女性の参加者が多いことが本イベントの特徴といえよう。また、既婚者が4割強、独身者が約6割弱であり、独身者が多いことも特徴であった。

年齢別では、30歳代と40歳代が主力であり、20歳代と50歳代がこれに続いていた。年齢別の参加者数は、正規分布しており、30歳から49歳がサンプルの約半数を占めていた。

参加者の年齢層に偏りがなかった理由としては、参加者の体力や技術、年齢等に柔軟に対応できるプログラムが提供されていたことと、日本のノルディックスキーの国際大会での活躍に刺激されて比較的新しい参加者層が幅広い年齢にみられたことが考えられる。また、ダウンヒル・スキーと異なり経済的で、家族や仲間と一緒に滑れることも女性の参加や30歳代以上の参加を高めているのかもしれない。

スポーツ・ツーリストの95%が関東一円を居住地としており、東京、埼玉、神奈川、千葉の一都三県で全体の88%を占め、アーバン型スポーツイベントに適した大会であったことを裏付けている。東武日光線は、東京の浅草から埼玉県を經由して栃木県日光市に通じているため、埼玉県居住者はイベントコミューターになりやすいといえよ

う。さらにサンプルの学歴をみると、短大または専門学校卒以上が全体の64%を占め、他のイベントへの参加者に比較して高学歴者が多いことが本イベントのもう一つの特徴であろう。

表1. スポーツ・ツーリストの属性

スポーツ・ツーリスト (N=337)						
度数 (人)		%	度数 (人)		%	
性 別						
男	性	164	59.2	独 身	138	42.6
女	性	113	40.8	既 婚	186	57.4
不	明	60		不 明	13	
年 齢 層						
本イベントへの参加回数						
20歳未満	30	9.2	初 参 加	206	61.1	
20 ~ 29	69	18.1	2 回 目	53	16.9	
30 ~ 39	78	23.9	3 回 目	32	9.4	
40 ~ 49	72	22.1	4 回 目	27	8.0	
50 ~ 59	59	18.1	5 回以上	19	5.6	
60歳以上	28	8.6				
不 明	11					
居 住 地						
最 終 学 歴						
東 京 都	113	33.9	小 学 校	4	1.3	
埼 玉 県	51	15.3	中 学 校	16	5.2	
千 葉 県	49	14.7	高 学 校	79	25.7	
栃 木 県	19	5.7	短 大・	55	17.9	
茨 城 県	18	5.4	専 門 学 校			
群 馬 県	4	1.2	4 年 制 大 学	118	38.4	
神 奈 川 県	64	19.2	大 学 院	25	8.1	
東 北 地 区	4	1.2	そ の 他	10	3.2	
中 部 地 区	11	3.3	不 明	30		
不 明	4					

## 2) サンプルのクロスカントリースキー歴

この奥日光クロスカントリースキー大会がクロスカントリースキーの初体験であったサンプルは、スポーツツーリストで6%、イベントコミューターで4.4%であった(表2参照)。経験が5回以下のサンプルは、スポーツ・ツーリスト79.2%、イベントコミューター82.2%とサンプル全体の約8割を占めており、初体験のサンプルと併せると約85%が初級者と推測され、このスポーツの新規性が窺われる。クロスカントリースキー大会が11回以上のサンプルは、両群とも8%弱と中級者以上は少なく、スポーツ・ツーリストとイベントコミューターの経験には有意差はなかった。クロスカントリースキー大会は、1988年以降徐々に増えてはいるものの、広大でしかもあまり高低差のな

い雪野原が必要なため、開催時期と開催場所が限定され、ジョギング大会のように頻繁には参加できないイベントである。従って、サンプルの参加経験回数が少ないことは、いたしかたないといえよう。

表1には、本イベントへの参加回数がでており、スポーツ・ツーリストの6割が初参加であった。約4割弱がリピーターという再参加者であった。このリピーター率は、ホノルルマラソン参加者(野川, 1992)に比べると約25%多いが、菜の花マラソンイベント参加者(野川ら, 1991)に比べて15%少ない。これは、このイベントの大会歴が浅いことと、大都市圏内の参加者が多いため、こだわりが希薄なことも影響しているとも考えられる。

表2. サンプルのクロスカントリースキー大会の過去の参加経験

タイプ別	スポーツ・ツーリスト		イベントコミューター	
参加回数	(N=337)		(N=94)	
	度数 (人)	%	度数 (人)	%
未 経 験	19	6.0	4	4.0
1 ~ 5 回	251	79.2	74	82.2
6 ~ 10 回	23	7.3	5	5.6
11 ~ 15 回	8	2.5	2	2.2
16 ~ 20 回	5	1.6	2	2.2
21 回 以上	11	3.5	3	3.3
不 明	20		4	

## 3) スポーツ・ツーリストの概要

### 参加形態

表3にサンプルの今大会参加における同行者の詳細が示されている。ツーリストの同伴者は「家族」が最も多く、「同好会・スポーツクラブ以外の友人」が2番目に多く、「単独」は約2割であった。これに対してコミューターは、「単独」が32%と最も多く、次いで「家族」と参加が多かった。スポーツ・ツーリストの同行者に家族や友人が多いのは、単独で宿泊するよりも気のあった人たちと同行する方が楽しいからであろう。また、旅館やホテル等における値段もシングルは割高になることから、経済的な理由もあると思われる。さらに、スポーツ・ツーリストの約5割が40歳以上で

あることから家族との同行が多く、この結果は『年齢が高くなるにつれて家族同伴の参加者が増える』という野川 (1992) の知見を支持している。これに対してイベントコンピューターに単独参加と家族同行の参加が多い理由は、日帰りのため早朝に出発する必要があるため、誰にも気兼ね無く、自分の行動をとりやすい環境設定のためといえよう。

参加種目と参加距離は両群ともに大きな差異はみられない (表4参照)。しかし競技会出場者は、スキーハイキングに比べて体調により大きな注意を払うことから、遠方から競技会に参加する人は宿泊するであろう。ちなみにスポーツ・ツーリストの方がイベントコンピューターよりも競技会参加者は約7%多かった。

表5には参加のきっかけとなった情報源が示されている。宿泊の有無に関わらず「新聞広告」が情報源として最も高く、東京新聞と東京中日新聞の活字メディアの効果を如実に現している。次いで「その他」が両群とも多いが、「その他」には過去の参加者への事務局からのDMなどが含まれている。また、イベントコンピューターに対しては「ポスター・チラシ」の効果も高く、関東一円にある東武鉄道や東武バスの車内のゲラ刷りや構内のポスターなどが目に付くところにあることを証明している。反対に、「知人から」や「所属するサークル」の口コミの効果は、イベントコンピューターでは全体の約25%であるが、スポーツツーリストでは33%と大都市圏における「口コミ」の宣伝効果は予想よりも低かった。この結果は、先行研究 (野川, 1991) の結果と逆であった。

### 旅行形態

サンプルの利用した主な交通機関では、電車利用はスポーツ・ツーリストが若干多いのに対し、イベントコンピューターは乗用車利用が多かった (表6参照)。この違いの一つは、開催地までの利便性であろう。大会要項には、「マイカーでの参加はご遠慮ください」と呼びかけているが、競技会参加のイベントコンピューターにとっては、当日では電車・バスサービスが受け付けに間に合わ

表3. サンプルの参加形態

タイプ別 参加形態	スポーツ・ツーリスト (N=337)	イベントコンピューター (N=94)		
	度数 (人)	%	度数 (人)	%
単 独 参 加	66	19.6	30	31.9
家 族 と 参 加	101	30.0	26	26.6
親 戚 と 参 加	5	1.6	1	1.1
同好会・スポーツクラブの仲間と参加	50	14.8	11	11.7
同好会・スポーツクラブ以外の友人と参加	88	26.1	15	16.0
そ の 他	27	8.0	12	12.8

表4. サンプルの参加種目及び距離

タイプ別 参加種目・距離	スポーツ・ツーリスト (N=337)	イベントコンピューター (N=94)		
	度数 (人)	%	度数 (人)	%
種 目				
競 技 会	103	30.5	22	23.7
スキーハイキング	234	69.6	71	76.3
不 明	0		1	
距 離				
15 KM	82	24.6	31	33.0
10 KM	89	26.3	19	20.2
5 KM	166	49.1	44	46.8
不 明	0		0	

表5. 本イベントについての情報源

タイプ別 情報源	スポーツ・ツーリスト (N=337)	イベントコンピューター (N=94)		
	度数 (人)	%	度数 (人)	%
知人から聞いて	89	26.3	15	16.0
テレビの宣伝	2	0.6	0	0.0
ラジオの宣伝	0	0.0	0	0.0
新聞の広告	127	37.5	29	30.9
ポスター・チラシ	51	15.0	27	28.7
雑誌の広告	32	9.4	9	9.6
所属するサークル・クラブ	22	6.5	8	8.5
機 関 誌	11	3.2	0	0.0
そ の 他	89	26.3	29	30.9

Note : 複数回答

ないよう設定されているため乗用車に頼らざるをえない。スキーハイキングの部への参加にしても、大会当日の朝10時までには受け付けを済ませる必要があることから、居住地によってはかなり早くから家を出る必要がある。

また、スポーツ・ツーリストの中に家族及び友人との参加が最も多かったことから、マイカー禁止ながら乗用車利用が相当数に昇ったことと思われる。これは、複数での旅行では乗用車を利用する方が電車よりも費用が割安になり、いろいろな場所に気軽に立ち寄れるからである。自家用車が4家庭に1台ある時代を迎え、アーバン型スポーツイベントにおける利用交通機関として乗用車を中心という傾向は今後続くであろう。

サンプルの宿泊先は表7に示されている。栃木県内からの参加者の2/3が中禅寺湖周辺のホテルや民宿・ロッジに宿泊したのに対して、栃木県外からの参加者は日光市内の宿泊施設を含め分散していた。宿泊に関しての斡旋は、東武興業の東武トラベルが行っていることから、奥日光周辺の宿泊施設を中心に希望者を割り振っていた。低料金を望む日光に詳しくない初参加者は、タクシーで約40分離れた日光市内の民宿に宿泊していた。宿泊料金は、1泊2食付きで7,000円から15,000円ほどの幅があり、大会特別料金となっていた。アーバンリゾートとしても有名な地域のため、この価格設定が損益分岐点料金としてどの程度参加者の安価感につながっていたか否かは、今後研究する必要がある。

表8には日光市周辺における観光行動状況についての全サンプルの複数回答である。宿泊の有無別による両群の違いは、「どこも訪ねなかった」という回答率にある。スポーツ・ツーリストは、68.5%であるのに対し、イベントコミュニーターはサンプルの87.2%が、イベント参加後はまっすぐ帰宅したことになる。日帰り参加者の約10人中9人が、イベントが済めばまるで勤務を終えてすぐ帰宅するサラリーマンのように行動していることがこの結果から窺えよう。

ツーリストの観光行動で最も多かったのは、日光東照宮や華厳の滝の名所旧跡めぐりであった。

表6. サンプルが利用した主な交通手段

タイプ別 交通手段	スポーツ・ツーリスト (N=337)		イベントコミュニーター (N=94)	
	度数(人)	%	度数(人)	%
鉄 道 (J R)	48	14.2	16	17.0
鉄 道 (東 武)	166	49.3	34	36.2
自 家 用 車	117	34.7	43	45.7
バス (高速バス)	1	0.3	0	0.0
バス (路線バス)	3	0.9	0	0.0
そ の 他	4	1.2	1	1.1

表7. サンプルが宿泊した施設

居住地別 宿泊場所	栃木県内 (N=23)		県 外 (N=314)	
	度数(人)	%	度数(人)	%
アストリアホテル	0	0.0	33	10.5
レークサイドホテル	0	0.0	15	4.8
中 禅 寺 ホ テ ル	8	34.9	59	18.8
中禅寺の民宿・ロッジ	7	30.4	75	23.9
戦場が原の民宿・ロッジ	0	0.0	12	3.8
日光市内の宿泊施設	1	4.3	43	13.7
知 人 宅	1	4.3	2	0.6
そ の 他	6	26.1	75	23.9

表8. サンプルの観光状況

タイプ別 観光場所	スポーツ・ツーリスト (N=337)		イベントコミュニーター (N=94)	
	度数(人)	%	度数(人)	%
日 光 東 照 宮	24	7.1	3	3.2
華 厳 の 滝	44	13.1	5	5.3
日 光 江 戸 村	4	1.2	2	2.1
日光ウエスタン村	1	0.3	2	2.1
奥日光湯本温泉	42	12.5	4	4.3
鬼 怒 川 温 泉	8	2.4	3	3.2
川 治 温 泉	3	0.9	3	3.2
塩 原 温 泉	4	1.2	2	2.1
大谷平和観音	3	0.9	2	2.1
そ の 他	40	11.9	2	2.1
どこも訪ねなかった	231	68.5	82	87.5



次いで、温泉ブームを想起させるように温泉で身体疲れをとっていたことである。この傾向はイベントコミューターにも表れており、観光行動ができる環境がイベント開催地周辺に必要なことを示唆している。

### 支出傾向

イベント参加における支出に関する6項目に回答したケースを分析対象とし、データを分析した結果、以下のことが明らかになった。

本イベント参加にかかった総費用の最も多い金額の幅は、スポーツ・ツーリストは2~2.9万円、イベントコミューターは1万円未満であった(表9参照)。スポーツ・ツーリストでは、全体の3/4が1~3.9万円の幅で支出しており、イベントコミューターの約85%は2万円未満の支出であった。ちなみにスポーツ・ツーリストの支出総額の平均は、27,758円であった(表10参照)。

支出の中で最も大きな項目は、宿泊費と交通費であり、どちらも1万円未満に抑えようとする傾向がみられた(表10参照)。みやげ代や飲食費に関しては、5千円未満の支出がスポーツ・ツーリストの7~8割を占め、余計な支出を控える傾向にあったと考えられる。本イベントがクロスカントリースキーだったため、事前準備にかかる費用が約7,500円必要であった。これは、クロスカントリースキー用の衣服や小物などを揃えるための費用であったと考えられる。参加者全員に、完走後熱湯の入った2種類のカップラーメンと豚汁がビールや清涼飲料水と一緒に支給されことから、飲食費の出費はある程度止められていたことが窺える。

表10を見る限り、観光地におちる現金と考えられる宿泊費、飲食代とおみやげ代は、ツーリスト1人当たり14,134円である。本イベントでは、スポーツ・ツーリストとイベントコミューターの比率が2:3と見積もられていることから、スポーツ・ツーリストが日光市にもたらす直接消費効果は、約850万円と推定される。

表11の支出限度額を見ると、宿泊の有無に関係なく本サンプルの最も高い希望額は、3~3.9万円であった。全体の傾向としては、イベントコ

ミューターの7割が4万円未満を希望しているのに対して、スポーツ・ツーリストの7割は2~5.9万円の幅と回答しており、低料金志向とreasonable料金志向に大別できよう。

表9. サンプルのイベント参加の支出総額

タイプ別 支出総額(万円単位)	スポーツ・ツーリスト (N=337)	イベントコミューター (N=94)		
	度数(人)	%	度数(人)	%
1万円未満	29	9.5	44	50.6
1~1.9万円	80	26.1	30	34.5
2~2.9万円	109	35.6	6	6.9
3~3.9万円	46	14.1	2	2.3
4~4.9万円	12	3.9	0	0.0
5~5.9万円	16	5.2	1	1.1
6~6.9万円	4	1.3	2	2.3
7~7.9万円	2	0.7	0	0.0
8万円以上	11	3.5	2	2.3
不明	31		7	

表10. スポーツ・ツーリストの平均支出額

支出項目	平均支出額*	(n)
旅行代金	9,474	(313)
事前準備費	7,433	(235)
日光での宿泊費	9,567	(303)
日光での飲食代	2,264	(267)
おみやげ代	2,303	(263)
その他	1,482	(206)
支出総額	27,758	(306)

Note: 平均支出総額 32,523\* \*単位:円

表11. サンプルのイベント参加での支出限度額

タイプ別 支出限度額(万円単位)	スポーツ・ツーリスト (N=337)	イベントコミューター (N=94)		
	度数(人)	%	度数(人)	%
1万円未満	8	2.8	10	12.0
1~1.9万円	17	5.9	15	18.1
2~2.9万円	47	16.4	16	19.3
3~3.9万円	74	25.8	18	21.7
4~4.9万円	13	4.5	2	2.4
5~5.9万円	66	23.0	7	8.4
6~6.9万円	8	2.8	0	0.0
7~7.9万円	3	1.0	2	2.4
8~8.9万円	4	1.4	2	2.4
9~9.9万円	0	0.0	0	0.0
10万円以上	47	16.4	11	13.3
不明	50		11	

## 結 語

本研究の目的は、宿泊を伴うスポーツイベントの参加者を“スポーツ・ツーリスト”と定義し、国内における冬季イベントへのスポーツ・ツーリストの実態を明らかにすることであった。そこで栃木県日光市光徳温泉において1993年2月28日に開催された“第6回奥日光クロスカントリースキー大会”の参加者1,200名を対象として、配票回収法による質問紙調査を実施した。返送された質問紙から、スポーツ・ツーリストに該当するサンプル数337名のデータを分析した結果、アーバン型スポーツイベントへのスポーツ・ツーリストの特徴は、以下のようにまとめられる。

- 1) 性別に関係なく家族や友人との同行が多く、参加経費を節約しながらもイベント参加を楽しむ傾向が強い。
- 2) 年齢層に関係なく安くて、近場で、しかも短期間楽しめる「安・近・短」の傾向が強く反映されている。
- 3) 利用交通機関は、行動範囲の自由度と時間の融通さ及び経済的理由から乗用車が主流となろう。

## 謝 辞

本研究は、平成4年度文部省科学研究費補助金(一般研究C:04680136)の助成を受けて実施した。本稿は、第43回日本体育学会(1993年11月18日:大阪)において発表し、議論となった点を踏まえてデータの一部も加えてある。

データの収集については、東京新聞スポーツ事業部の大槻高弘氏および奥日光クロスカントリースキー大会実行委員会に多大な協力をいただいた。また、データ解析に関しては本学大学院生の國本明德君に協力していただいた。ここに感謝の意を表する。

## 引用・参考文献

- 1) Collins, M. F.: "The economics of sport and sports in the economy: some international comparisons", *Progress in Tourism, Recreation and Hospitality*

*Management Volume Three*. Belhaven Press, 1989, pp.184-214.

- 2) De Knop, P.: *Some Thoughts on the Influence of Sport on Tourism*. *Proceedings of the International Seminar and Workshop on Outdoor Education, Recreation and Sport Tourism*, pp.38-45, Emmanuel Gill Publishing, 1987.
- 3) Glyptis, S. A.: "Sport and tourism," *Progress in Tourism, Recreation and Hospitality Management Volume Three*. Belhaven Press, 1989, pp.165-183.
- 4) JTB REPORT'92 -日本人海外旅行のすべて-, 日本交通公社, 1992.
- 5) 観光白書(平成4年版). 総理府編 大蔵省印刷局 1992, pp.25-45.
- 6) Kenyon, G. S.: *Sport Involvement: A Conceptual Goal and Some Consequences in Thereof*, *Sociology of Sport*, Athletic Institute, 1969, pp.79-80.
- 7) 菊池秀夫・野川春夫・松本耕二: スポーツイベント参加者の支出傾向に関する研究. 日本体育学会第42回大会大会号, p.441, 1991.
- 8) Kudo, Y., Nogawa, H., & Aida, M.: *A Study of Japanese Sport Tourists*. *ICHPER 36TH WORLD CONGRESS Programs and Abstracts*, p.76, 1993.
- 9) 工藤康宏: スポーツ・ツーリストに関する研究 - イベント参加以外の余暇活動に着目して -, 鹿屋体育大学大学院研究科修士論文, 1993.
- 10) 工藤康宏・野川春夫・会田 勝: スポーツ・ツーリストに関する研究 - イベント参加以外の余暇活動に着目して -. 日本体育学会第44回大会号A, p.181, 1993.
- 11) Leiper, N.: *The Framework of Tourism Towards a Definition of Tourism, Tourist and the Tourist Industry*. *Annual Tourism Review*, 6(4): pp. 390-407, 1979.
- 12) 松本耕二・野川春夫: ホノルルマラソン完走者の満足要因の分析. *レクリエーション研究*, 第23号, pp. 38-39, 1990.
- 13) McPherson, B. D., Curtis, J. E., & Loy, J. W.: *The Social Significance of Sport*. *Human Kinetics Books*, 1989, pp. 10-14.
- 14) 野川春夫・菊池秀夫・山口泰雄・長ヶ原誠・池田勝・三浦嘉久: 地域活性化におけるスポーツイベントの総合研究. 鹿屋体育大学調査報告書, pp. 1-19, 1990.

- 15) 野川春夫・菊池秀夫・山口泰雄・長ヶ原誠: スポーツイベントに関する研究(1)ーイベント参加者の視点からー. 鹿屋体育大学研究紀要, 第6号, pp. 57-67, 1991.
- 16) 野川春夫: スポーツ・ツーリズムに関する研究-ホノルルマラソンの縦断的研究-. 鹿屋体育大学研究紀要 第7号, pp. 43-55, 1992.
- 17) 野川春夫「生涯スポーツのイベント入門11: ハワイ・ホノルルマラソン」, 体育科教育, Vol.41, No.3, pp. 58-62, 大修館書店, 1993. (1993a)
- 18) 野川春夫「地域におけるスポーツイベントの動向」, 社会教育, Vol.48, No.11, pp. 32-34. 全日本社会教育連合会, 1993. (1993b)
- 19) 野川春夫・山口泰雄・國本明德: スポーツイベント参加者の支出傾向に関する研究. 日本体育学会第44回大会大会号A, p.180, 1993.
- 20) Ruskin, H.: Selected Views on Socio-Economic Aspects of Outdoor Recreation, Outdoor Education and Sport Tourism. Proceedings of the International Seminar and Workshop on Outdoor Education, Recreation and Sport Tourism, pp. 18-37, Emmanuel Gill Publishing, 1987.
- 21) 塩満勝磨: 中高年者国際競技会参加者の実態について. 日本体育学会第41回大会大会号, p.91, 1990.
- 22) 「スポーツと海外旅行」 Sports Industry, No.58, pp. 10-46, 1991.
- 23) スポーツ産業研究会報告書 '90. スポーツ産業研究会編, 1990.
- 24) 運輸白書 (平成元年版). 運輸省編 大蔵省印刷局 1989, pp. 323-333.
- 25) Wang, Y.: The Scope of Sport Tourism as an Important Facet of Singapore's Image as a Gateway to the Orient. Proceedings of the International Seminar and Workshop on Outdoor Education, Recreation and Sport Tourism, pp. 78-81, Emmanuel Gill Publishing, 1987.
- 26) Westland, C.: The Philosophy of Outdoor Education, Recreation and their Place in Modern Society. Proceedings of the International Seminar and Workshop on Outdoor Education, Recreation and Sport Tourism, pp. 7-17, Emmanuel Gill Publishing, 1987.
- 27) 山田文男・神野稔: ホノルルマラソンフィニッシャー日米比較研究. レクリエーション研究, pp. 68-73, 1988.
- 28) 山口泰雄・野川春夫・菊池秀夫・池田勝: 生涯スポーツイベントの参加者研究ーねりんピックの事例からー. 日本体育学会第41回大会大会号, p. 99, 1990.
- 29) 山口泰雄・野川春夫・菊池秀夫: 地域活性化に及ぼすスポーツイベントの研究. 日本体育学会第42回大会大会号, p.145, 1991.
- 30) 山口泰雄・野川春夫・菊池秀夫: 地域活性化におけるスポーツイベントの社会経済的研究. 平成3年度文部省科学研究費 (一般研究C) 研究成果報告書, 神戸大学, 1992.